

死刑廃止のための大道寺幸子・赤堀政夫基金について

生前、多くの死刑囚や獄中者に面会し、励まし、「生きて償う」ことを共に模索し、死刑囚の母として、社会、国際機関、メディアに対して、日本の死刑制度の実態、死刑囚処遇、死刑囚の人権について語り続けてきた大道寺幸子さんが2004年5月に亡くなりました。「死刑制度をなくしたい」「死刑囚の人権は保障されなければならない」という幸子さんの遺志を生かすため、遺された預金を元に、基金が創設され、死刑囚の再審請求等への補助金、死刑囚の表現展の開催と優秀作品の表彰のために使われることになりました。

当初の予定だった10年間の過ぎましたが、冤罪事件の元死刑囚赤堀政夫さんから資金提供の申し出があり、2015年からは「大道寺幸子・赤堀政夫基金」として再出発することになりました。「死刑囚の表現展」へ応募された文芸作品は何冊も出版され、絵画作品は多くの絵画展で紹介され注目を集めてきました。毎年「響かせあおう死刑廃止の声」の集会で、その年の応募作品の講評や展示を行っています。今年はその16回目です。これらの作品が「日本に死刑制度があった時代の記録」となることを願って……。

なお2020年度全応募作品の展示は、昨年同様、松本治一郎記念会館で開催します。

池田浩士 (いけだ・ひろし)

ドイツ文学者。京都大学名誉教授。死刑をめぐる著作には『死刑の[昭和]史』、編著『逆徒―「大逆事件」の文学』、『蘇らぬ朝―「大逆事件」以後の文学』、『少年死刑囚』、『裁判小説 人耶鬼耶』(解説)、ともにインパクト出版会、がある。

表現展選考委員

加賀乙彦 (かが・おとひこ)

作家。死刑囚を扱った小説に『宣告』新潮社、『ゼロ番区の囚人』ちくま文庫が、東京拘置所での医官の体験をもとに『死刑囚の記録』中公新書、『死刑囚と無期囚の心理』金剛出版、『ある若き死刑囚の生涯』ちくまプリマー新書などがある。



井上孝紘「刺青入りの服」

香山リカ (かやま・りか)

精神科医、評論家。立教大学教授。『ヒューマンライツ人権をめぐる旅へ』ころから、『半知性主義でいこう』朝日新聞出版、など多数。

坂上香 (さかがみ・かおり)

映像ジャーナリスト。死刑問題・被害者問題をあつかった作品に「ジャーニー・オブ・ホープ―死刑囚の家族と被害者遺族の2週間」1996年、「Lifersライファーズ 終身刑を超えて」2004年、「トークバック 沈黙を破る女たち」2013年。著書に『癒しと和解への旅』岩波書店、『ライファーズ』みすず書房、がある。最新作『プリズン・サークル』は全国で公開中。



加藤智大
「メルシー原正志」便箋31枚



金川一「自画像」

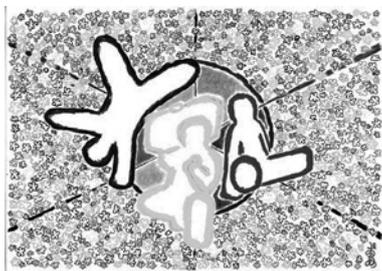
川村湊 (かわむら・みなと)

文芸評論家、法政大学教授。死刑文学をめぐる対談『死刑文学を読む』(共著)、永山則夫論の収載されている『風を読む水に書く』講談社、『震災・原発文学論』、『紙の砦 自衛隊文学』、『銀幕のキノコ雲映画はいかに「原子力/核」を描いてきたか』インパクト出版会、がある。

北川フラム (きたがわ・ふらむ)

アートディレクター。アートフロントギャラリー代表。「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」「瀬戸内国際芸術祭」総合ディレクター。主な編著作に『希望の美術・協働の夢 北川フラムの40年』角川学芸出版、『美術は地域をひらく』現代企画室、など。

2019年の
応募作品から



奥本章寛「カレンダー2019年8月 わんだふりい」



西口 宗宏「A SELF」
便箋4枚

太田昌国 (おおた・まさくに)

民族問題研究・編集者。大道寺幸子さんの甥にあたり、基金の運営委員の一人。著書に『「拉致」異論』、蓮池透氏との共著『拉致対論』ともに太田出版、『(極私的) 60年代追憶』インパクト出版会、『(脱・国家) 状況論』現代企画室、『【増補決定版】「拉致」異論―停滞の中で、どこに光明を求めるのか』現代書館、などがある。

四谷区民ホール

〒160-8581 新宿区内藤町87番地

地下鉄：東京メトロ丸ノ内線
「新宿御苑前」2番出口(大木戸門)より徒歩5分
都バス：品97 新宿駅西口～品川車庫「新宿一丁目」下車

